

Bengal and the Arabian Sea, 1986: WMO/TD-No. 84.

Tropical cyclone operational plan for the South Pacific and south-east Indian Ocean, 1989: WMO/TD-No. 292.

Tropical cyclone operational plan for the south-west Indian Ocean, 1990 (New Edition): WMO/TD-No. 618.

Typhoon committee operational manual-Meteorological component, 1987: WMO/TD-No. 196.



吉野正敏 著
「風の博物誌」

丸善, B 5 版, 80頁, 3296円

「小さな谷の風」に魅せられて
風の世界に迷いこむ。
風駆けて

…… (略) ……

風の家を守った人々の
風車をつくった人々の
歴史をたどる。

…… (略) ……

風の世界に魅せられて
風の音に誘われて
たどるは 風の王国

40年以上にわたって風の研究を行ってきた著者の軌跡は、表紙カバーの見返しに書かれているこの詩に端的に表されている。これがまたこの本のモチーフにもなっている。

風に関連する写真を集めた美しい写真集であるとともに、気象学的にまた地理学的に興味深い色々な現象や事象の啓蒙書でもある。目次を示すと、四季の風・風と風土・風の指標・風と人間・風の利用・宇宙から見る風、となっている。これからも伺えるように、局地気候からグローバルな気候に関係する風が取り扱われている。風の変化に四季の移り変わりを感じ、季節風や空っ風などに特徴づけられる風土を、著者は日本独特のものと考え、日本を「風のくに」としてとらえている。そして、風に対する豊かな感性を育んだ日本、その日本の風土に住む人々に、風のことを少しでもより深く知ってもらいたい、目を向けてもらいたいという気持ちでこの本を作っている。目に見えない風を読者にどう伝えるか。著者

は、「はじめに」で次のように述べている。

『風は見えない。写真で見えるものは、風の影響によって生活する動物・植物・人間の姿、風の作用でできた砂丘や雲などである。いわば間接的な現象でしかない。しかし、風が詩歌でうたわれ、小説の題名となり、絵や音楽のモチーフとなるのは、やはり間接的ではあっても風がそれらを通じて強くわれわれにうったえるからである。したがって、写真を通して、われわれの世界における風の作用を読者に伝えることは十分に可能だと私は思う。また、試みる価値のある仕事だと思う。』

このような著者の意図は本の中で十分に実現されている。タンポポの種を運ぶ心地よいそよ風から荒れ狂う台風、ビル風からアドリア海のボラ、越中八尾の「風の盆」からオランダの風車の歴史、著者の目は時間と空間の座標軸の中を縦横に駆け巡り、われわれに風の世界を現出してくれる。四季折々の写真も美しいが、やはり著者の特徴を最もよく伝えているのは、局地風に関係する部分である。防風林や防風垣、風の指標としての雲や偏形樹など、これまで目にしたものでカラー写真で見ると一段と興味深い。また著者の気候研究者としての視点が文章の隅々まで行き渡っている。風と文明・砂漠・風の神・風の塔・風車・風乾などには著者の地理研究者としての視点が光っている。他の部分との釣合もあるだろうが、局地気候や風土論の部分はもっと多くの写真を掲載して欲しい所である。「おわりに」において著者は『……“まだまだこれから”の感、ひとしおである。私の「風」の旅はまだ終わらない。』と述べている。局地風や風と風土を中心とした次の写真集が出版されることを期待したい。

著者の学問的な著作や論文を読む合間に、お茶でも飲みながらひとくけば、気楽に風の世界に遊ぶことができる。同じ著者による「風の世界」(東京大学出版会刊)をあわせて読めば一段と興味深いものである。

(気象研究所 藤谷徳之助)